

# 変動期のアフリカ農村

－ ザンビアの村の事例から －

児玉谷 史朗

## はじめに

1990年代のザンビアは経済自由化と民主化を中心として大きな変動期であった。1990年代はじめに、それまで20年近く続いた一党制が破棄され、複数政党制が導入されて、独立以来の与党統一民族独立党(UNIP)とカウング大統領から政権交替が実現した。1991年に政権に就いたチルバ大統領の下で国営企業の民営化、貿易自由化などの経済自由化政策が進められた。

筆者は、1990年代に島田周平氏の科学研究費の研究プロジェクトのメンバーに加えてもらいザンビアの首都ルサカの北側郊外にあるC村を調査する機会を得た。以後10年近くはほぼ毎年調査に出かける機会があった。この村についてはすでに島田氏自身が本を2冊(島田[2007a]; [2007b])書いている他、一緒に調査した半澤氏も論文を書いているが(半澤[2002])、この村と出会って15年以上を経過したので、筆者なりにこの村の変化を振り返って、そこから見える変動期のアフリカ

の農村社会を考えてみたい。

## 1. 村の概要

ザンビアのC村について簡単に紹介しておこう。C村はルサカからコッパーベルト(産銅地帯)へ向かう幹線道路を約90キロメートル北上した地点から東に少し入ったところにある。農産物の販売先という点で考えると鉱山都市カブウエの近郊で、首都にも近く、コッパーベルトからも遠くないので都市市場へのアクセスに恵まれた立地にある。村の歴史は新しく、1970年代の半ばに開拓された。この地域一帯の特徴であるが、村はレンジェというエスニック・グループの土地にありながら、村民はレンジェだけでなく多くのエスニック・グループで構成されている。ザンビア各地のエスニック・グループが居住するのみならず、ジンバブウェからの移民の子孫も含まれている。

ザンビアの小規模農民は都市住民の主食であるトウモロコシを天水農業で生産するのが一般的で

ある。トウモロコシは農民が自家消費し、都市の市場へ販売もするので、自給用食料作物と換金作物という二重の性格を持っており、多くの農民にとって最も重要な作物と言える。C村でもアップランド(低湿地でない土地)の畑で雨季にトウモロコシを中心とした作物を生産することが農業の中心となっている。C村および一帯の地域の農業の特徴は、これに加えてダンボと呼ばれる低湿地で乾季にトマトやスイカなどの野菜を生産しているところにある。トウモロコシの生産と野菜の生産はC村の多くの農民にとって農業経営の二本柱となっている。トウモロコシはアップランドの畑で雨季に天水農業で生産され、野菜は乾季にダンボで小規模灌漑により生産されるので、土地や季節の点で相互補完的であり、土地や労働力の有効活用につながっている。

1992年にこの村で調査を始めたとき、当時ザンビア経済が長期の停滞と不振にあえいでいた中で筆者にはこの村がとても活気ある、繁栄した村に見えた。ダンボでの野菜生産は政府や援助機関の指導で広まったのではなく、農民自身の知恵や工夫によって広まり、生産も流通も政府や大企業ではなく、小規模な農民や商人が担っている。ダンボという低湿地で地下水位が高いことを利用した小規模灌漑は、大規模な灌漑施設の造営を伴うものではなく、簡易で低コストであるので、資金制約の大きい小規模農民に適した灌漑農業である。なかには、トマトなどの販売から多額の収入を得て成功した農民(女性農民もいた)があり、彼らはその収入でトウモロコシの生産に必要な化学肥料や牛車を購入したりして、経営の拡大と資本蓄積を進めているように見えた。またジンバブウェからの移民も含めた多数のエスニック・グループが平和的に共存しており、意欲のある若い農民も多いように思えた。しかしその後10年以上に

わたってこの村を観察できたことにより、このような「繁栄した、平和な村」という像は、たまたま多くの条件が整ったときに成立したものであって、必ずしも恒常的なものではなかったことが判明する。国家レベルの経済政策や政治体制、ローカルなレベルの人口と土地、政治によって条件が変わり、それに人々が多様に反応することでさらに条件が変わっていく。1990年代がザンビアにとって大きな変動期であったために、人々の行動を正当化したり、律する制度や価値観も複数のものが併存するなど流動的であった。その結果、農民の反応も多種多様なものになったと言えるのではないか。

## 2. 農産物流通自由化の影響

ザンビアでは1993年から94年にかけて農産物と農業投入財(化学肥料など)の流通自由化が実施された。これは経済自由化政策の一環として行われたものであり、時代の大きな流れを反映したものであった。第1節において紹介したように、C村の農業の柱の1つは野菜生産であり、その流通や生産技術などには国家の介入や支援はなかった。したがって農民は野菜生産において自由市場に接していたのであり、農産物流通自由化はその意味では全く新しい事象ではなかった。しかし農産物流通自由化はC村の農業や家計に大きな影響を与えた。農家経営においては、自家消費食料を確保し、国家統制の市場に余剰を販売するトウモロコシ生産と自由市場の野菜生産が組み合わさって相互補完的に機能していた。自家消費食料が基盤にあって食料が保証されるからこそ、市場向けの生産を行うことができたのである。また市場(地域)によって値段が変わり、季節や日によって価格変動する野菜と異なり、国家管理のトウモ

ロコシや化学肥料については全国一律に毎年政府公定価格が設定されていたので、農民は事前に収入やコストを計算することが容易であり、ある程度の計画性をもたせることができた。これが農産物物流通自由化によって変化した。トウモロコシも地域や季節によって価格が変化、変動するようになり、収益が予想しにくくなったのである。さらに、農産物物流通が自由化されると多くの農民はトウモロコシ生産において困難に直面した。トウモロコシ価格の上昇に比べて化学肥料の値上がり幅の方が大きかったのに加えて、化学肥料の供給が減少して入手しにくい状況が続いたからである。

農業の中心をなすトウモロコシ生産の困難に直面して農民はさまざまな対応をとらざるを得なくなった。農民の対応は、2つに大別できる。1つは、トウモロコシの生産を維持する方策を追求するやり方である。もう1つは、トウモロコシの生産・収入の減少を補うべくそれ以外の経済活動を強化したり、新たな経済活動を始めることである。

トウモロコシの生産を維持する方策は、さらにいくつかに分けられる。1つは政府の融資を得ることである。政府は農産物物流通を自由化した後も形を変えてトウモロコシ生産のための化学肥料への補助金を供与した。補助金で割引された化学肥料を入手するには農民は組合を作って応募しなければならない。C村ではその際政治家や政党とのつながりがある村人が中心になって組合を結成した。第2は、森林保護区への移動、入植である。C村の隣にある森林保護区は1990年代の後半に周辺の村の住民が入植し、森林を農地に転換してしまった。これは経済自由化の結果起きたことではないが、入植して畑を開いた農民は広大な畑から多くのトウモロコシを収穫したので、結果的にトウモロコシの生産を維持・拡大する1つの方法で

あったことになる。第3に、これはやや特殊な事例であるが、村長は、伝統的な権威や慣習の復活を訴え、その地位を利用して村民の労働力を動員して自らの畑でトウモロコシ生産を実施しようとした。これはC村の村長が独自に考えたわけではなく、他の村でも行われたことが報告されている。

トウモロコシ生産以外の経済活動を強化・拡大する対応には次のようなものがあった。1つはダンボでの野菜生産の拡大、強化である。拡大はダンボ畑での耕作を新たに始めたり、面積を拡大することである。1990年代後半にはダンボ畑での耕作が拡大していくのが観察された。ダンボ畑での野菜生産の強化とは、灌漑の本格化である。2000年にNGOが村を訪れ、足踏みポンプの導入と灌漑用の小さな圃場の整備を勧め、資金的な援助を行ったことを契機として、一部の農民が足踏みポンプを導入し、さらにその後一部の農民がガソリンポンプを購入するようになった。

トウモロコシ生産以外の経済活動の拡大・強化の2番目は、さまざまな非農業経済活動を行うことである。自宅の庭に小店舗の雑貨屋を開業したり、トウモロコシや化学肥料の買い付けや販売をしたり、近くの幹線道路沿いで野菜を売ったり、魚の行商をしたり、といった活動が盛んになった。

### 3. 人口増加、土地問題、外部からの資金や技術の導入

調査を始めた1990年代はじめには村民の世帯主の多くは、自らが村へ移住してきた一世であった。村は1970年代の半ばに開村した新しい村である。しかし1980年代後半以降村への人口流入は加速化し、人口が急増した。開村当時は森林に

覆われていた一帯も1990年代半ばにはほとんど完全に開墾された状態になり、村内で新たな土地が不足するようになった。化学肥料の利用やダンボを野菜生産に利用する(小規模灌漑)といった形態での土地利用の集約化も一定程度達成されていた。そこに化学肥料の価格高騰、入手困難で集約的農業の維持が困難になったのである。

上述したように、農産物流通自由化に対する農業面での農民の対応は、農業の集約化を促進するものと農地面積の拡大を指向するものに分類することができる。組合を作って補助金で割引された化学肥料を入手し、トウモロコシ生産を行ったり、ダンボ畑で野菜生産を強化するのは集約的農業を指向している。特に足踏みポンプの導入と小さな圃場の整備による新しい小規模灌漑は意識的に農業の集約化を指向している。これを支援したNGOは環境保全型の農業や植林もあわせて振興している。逆に、農地面積の外延的拡大によって対応しようとしたのは、森林保護区への入植・農地開墾を行った農民たちである。彼らの中の成功者は大量のトウモロコシを収穫したが、それは、森林を開墾直後の土地で施肥せずとも収量が高かったのと広大な畑を開くことができたからである。

人口が増加し、土地が不足し、農業の集約化も1つの限界に達した状態で、土地問題が発生する。対外的には隣村との境界争いが頻発するようになった。村内でも村長と一部の農民たちの間で土地を巡る対立や軋轢が起きた。C村で土地問題を激化させる条件が村の内外にあった。外的条件としては、1991年の「民主化」後、首長(チーフ)などの伝統的支配者が復権され、伝統的色彩が強化される傾向にあることが挙げられる。C村の地域でも首長の祭りが行事として実施されるようになった。内的条件としては、1996年に二代目村長

が死去し、三代目村長が就任したことが挙げられる。三代目村長は伝統的権威の復活・強化という流れにも乗って、村の土地に対する管理権を強化し、土地の割替えを求めたり、村民から土地を取り上げたりするようになった。村民たちの一部はこれに対抗して土地の「権利証書」を獲得しようとしたり、外部の人権団体に訴えたりするなど、国家の法制度や「市民社会」の制度を利用する動きさえある。

以前は農民たちは政府の政策・制度により一律に恩恵を受けたり、全く農民たちだけで実践してきた状態にあったものが、経済自由化、「民主化」の影響もあって、NGOや政治家、政党などに働きかけて資金援助や技術を導入するという動きも起きるようになった。補助金で割引された化学肥料を入手するのに政治家や政党とのつながりを利用したり、足踏みポンプや環境保全型農業を普及するNGOが村に入ってきたりするようになった。その際重要なことはこれらの恩恵に与るには農民は組合やグループを結成し、そのメンバーにならなければならないということである。そうするとだれが村の外部の組織や援助者との仲介をするかというゲートキーパーの役割と村人同士をつなぐネットワークが重要な意味をもってくる。

1990年代までのダンボ畑での小規模灌漑は井戸からバケツで水を汲んで作物の根元に給水するという労働集約的なものであり、ダンボへのアクセスと労働力さえあればだれでも実行可能であった。しかし2000年頃を境に足踏みポンプやガソリンポンプが導入されるようになると小規模灌漑もしいに資本集約的になってきている。上述のようにグループに入れるかどうかという社会関係資本も含め、一定の資本をもっているかどうかで灌漑農業に差が生じるようになってきている。

## おわりに

1990年代半ば以降の農産物流通の自由化をはじめとする経済自由化政策、ほぼ時を同じくして起きた「民主化」、それに付随して起きた伝統的な権威の復活の動き、NGOの活動の活発化、このような全国レベルの変化やC村とその近辺における人口増加と未開墾地の縮小、C村における村長の交替、といったローカルな動き、これらに対する農民の対応は多岐にわたり、必ずしも同一ではない。それは農業における土地利用の集約化といった1つの方向に収斂していない。人口増加と農産物流通の自由化をはじめとする要因によって一方では森林保護区への入植・開墾を通じての森林破壊が起き、人口増加が資源枯渇や環境破壊を引き起こすという事態が起きた。しかし同時に別の農民たちは、トウモロコシ生産のための化学肥料の入手の努力、ダンボ畑における、より集約的な灌漑農業の導入といった対応をしてきた。こちらは人口増加が技術革新を引き起こして農業の集約化を進めるといった理論的経路を示している。

政府や市場との関係も一様ではない。政治家や政党との関係も利用しつつ補助金で割引された化学肥料を入手するという対応は、経済自由化政策の導入後も政府が政治的意図もあって化学肥料の配分に介入し続けたことに符合している。同時にNGOや民間企業が直接村にプロジェクトを導入

する例も増えている。また一方で首長や村長といった伝統的権威や慣習法的な共同体原理が強調され、他方で「民主化」によって導入された人権団体や開発・環境NGOが村の世界に入ってくる。このように異なる原理や制度が併存する状況にあった。これに対して農民たちは、それぞれが都合のよい原理や制度を利用して、資源獲得や他者との交渉を行い、生存維持を図っている。1990年代はじめ以降のC村の歴史を振り返ると、このような状況が浮かび上がってくる。農民たちは状況の変化の中でさまざまな試行錯誤を行っており、思い通りの目的を達しなかった場合も多い。しかし経済自由化と民主化という大きな流れに押し流され、翻弄されてきたというだけではない。大きな流れ自体がその中に矛盾した小さな渦やよどみを抱えていることもあり、農民たちはそのような流れを利用して生き延びているのである。

### 【参考文献】

- 島田周平 [2007a] 『アフリカ 可能性を生きる農民 環境 - 国家 - 村の比較生態研究』京都大学学術出版会。  
 [2007b] 『現代アフリカ農村 変化を読む地域研究の試み』古今書院。  
 半澤和夫 [2002] 「グローバル化とアフリカのある村 ザンビアの事例」(草野孝久編 『村落開発と国際協力 住民の目線で考える』古今書院)

(こだまや・しろろノ一橋大学大学院社会学研究科)